主從心得草

下

ロ g
1540
2

門口仁9
1.540
2

京都帝國大學圖書之印

主從心得の事　下巻

おりべのまさといふ書あり。或人心得を信仰おこす。
朝暮の勤免おこたらざれば。或は一人旅。所々おぢゐる
ものを濟ましめ。身の守護とせしまもり。或は子供
の邪精星へ出て人々惑ひ騒しき事あり。彼何某の道
のまもり。まもりとなるべし。身をまもるべし。
居たり。手負狂の癖とおもふ。梦を見苦しきもの
みて。此一文字は孰者なり。先にうけて後にすべし。
孫をとりてはぐくみやしなひ。家をしりやしなひ。

一河子張わ者て。麝香般若。波羅密多と。夢を
かごりみるまんが行を行る事猶矢を射の如く。
引ゑし。散くようのうまぐ。疑ケ所多りてさくを
出さぐ例を体を死ぬまるとありる沢。くこえ戸板み
のせて。帰りしとあり。男雑を除くといふ。ものぐ
心徒と閑ひやみてやく。の如しとゆり。滅ま男雑ば
ちりて。音ひとわてくゑ丸ま。緊ひあを徒あり。我れ。
閑ひ板ばうくい故ま。の如しさん撰婚戒と。ちゝぬ
やく仏り。悦び和ゑて。徒ゑて。徒ゑとゝ。急仏を。る夢に。

ちゝまおど。場所をちゝぬ故と。屋理沢仏ていふ所ぬ。
かすいはなをやかあんぐも。見い者を高ちるとのこ。僧
書ふも。悦びの所よて。憂の心しうれいの場処さく。
悦びのこ仏しちゝ是を目ゝくいふ。徒ゑ。
ゑるぐし。舌と附所をうゝ。仏ゑ。日用心法拙情
の巻の。ふ星沢ちる名馬と。鼠を捕ふい猫にちゝの
所と。ゆゑ世見ゑぐし
ある御方様紀州御五城の御仕例流ゆさんゆゑ。
特ふ。くせくと。夢をかくまぐ。取てゑくを栄。畜

類あんぢ猛獣いと名別あることのにて。雖甚河伯
ゆえ与る事。確情あり。と信じ人海ごろ
をゆえて。素人京の皆。方稲を見くまつこ。何ごとて河
をきこつまけてかぶ。河を渡与るみゆ。人のまきを
ゆけたるを怒て。見ぐひんとだ事ひとうくるあり。
うくまあくしとつて。声きくゆくまぶくしん
ゆとやるを。何る御方ゆ一石ん。文盲あることの
あんぐゆ。甚業ゆ長じたる者ゆを形みけくる事
ありと感じゆひゆなりこれゆ伝てこれゆ。

愛と用法は善き事。必定あり。時処の事弘めおく
べき事なり

又下手なれば醫者の人参び用ひ過ぎて害を招くあ
り。又食物の腐はしたる食物を多喫は毒にして心を乱ぬ
川を渡り。甚強の人も溺れて死たる人とあり。ふか
き事を思はずして水に溺れすぎ用ふるの警戒とし
て水故はおぼれて死たる人とあり。是等の事自分に締
と作て甚多きは明らかしし人うつ食物の害ふんども用ひ
ふかるべし。兄弟中とおしく信友と中遠ふも

あり。常に心を乱らしきを人と。食物の後よりてふ所
を言ふ。是は物のかたり。四比の化が物つくべ食ぶ節と
つふ。寒の米を。食はる色が分とひく所。河房おこし
ぶや。拾たる食ひ。放をすいて。命と考ふ人とあり。食物
の出入が。病ひとありて。寂矢のうとる人もあり。食物
を宝と言て尊むふ。俗の為じや。縁を深くて命と食ふ
せんが為に。知るよ。是る事と言ぶる人ふ学味を腐敗
食べり。得ぶこと食物ふ。ふ況費し。利欲換毛よ。業と
つ矢。人の心のびるる志。孫じも。命ふ五制を編る所。

たとへば水難火難の時。衣類をひろひ。火に焼水
に溺るに同し。悪き事にあふべしとなり。然所はいら
ざいふをひろふ時は。所よりうりてくすしの所に渡し。
あまり用心過て。早く逃るほども及ばず。又衣類等の所に
とられ。欲ひかるゝ時。身をあやまつ。論なし。是ハ急に
逃ふべし。又江戸などにて火事の時。何より何ぞん
あまり狼狽んと。常に工夫をして。急事の用心するべし。
是を一つのはなしとする也
又ある人。其のふとん持ちある夜の屋根にて燕と雀と。

チヽクチヤ囀しをきゝて。燕の云ふ。其元ハ浦山しい
事かや。いか川に成ても。えまへしと。盆の内でござ
るが。我等ハ文盆を過。彼岸になるとすぐれ古巣をとる
捨て来るハ生く縁が無しぬと忘りとさへ。雀は
飛の事。身戦ひして怖て飛。燕類をとふしらしてく
るゝ。我等さへ。離別の愁をわり。汝又何故に彼岸と
聞て恐るゝや。雀のいふ。燕ハ社日を知りて巣を辞し
去るといふ事。古き書にあるなれば。今に始し事にあらず
悲しくもさして命の沙汰もなし。我等ハ命に関る恐。

大事なり。名聞・誠の道非者うたゝ孫ゞ。彼岸を
為島屋よりひ月例年の通り故〳〵ち。萩伺百拍燈伺の
百拍中日ゝ持参そゞし。幾日ゝ先祖の日。伺日ゝ釈の日子
の日おゞ〳〵て。百拍二百拍。方〳〵の法文。島屋も其ゝ尚
ゝて。前方より捕集免買伺の川先て。彼岸をすゝ川
日の国窮ゝ。ゝ分て寓金の為とあり。死ゝ生たること
義に浩。道非者の方へ拍ゝ。ゝ寺へ参ゝ。ゝ
伺ゝ〳〵和尚様が唱へて下されて。彼れ果て身にも
〳〵。彼岸ゝる間ゝゝ。故ゝ義

ゝ出てゝ。ゝる花ゝ〳〵。嬢の上ゝ義の為ゝ
ゝびわゝり。ト墓ホットゝ。ゝ見て。ゝ方ゝ走ゝ方
方墓参ゝて。ゝ墓ゝ。彼方へ向て礼をすると故
てゝゝゝを思ふゝ。故ゝて参ゝ嬢ゝ。
捕へゝ。ゝ伺の郷ゝゝ。推量ゝて。ゝ
ゝゝ呼ゝ。ゝ。ゝ花の。ゝ如ゝ。ゝ人ゝ。
ゝて。ゝ人ゝ出来。故ゝ人ゝ。捕へ人ゝ。
ゝ故ゝ。ゝて故ゝて。ゝ。ゝ。ゝ。
郷ゝゝて。ゝて。殺生。ゝ

ゑて後用ひるべし

四海の人民放生會ぶつぶつぬ米しぶ人とわるべ。
今流行のいぶぶ家みのせよ。名ぶにと移よ。故
生命の出産する人ぶ。あべ麁き米こ生業の産ぶ
而寿を画たらしめ。命がぶ。いの。篤ぶ人用おと云
ぶ。命と活おぐとの多後ありたとく大千界よとち
たる宝でこと。命ぶ人永寿いあるぶい。甚大米ぶ命
と。五穀を米。悪の中の大悪也。穀ひおくてぶあっ
如米こんぶ人おて。放生命をあべ麁。殺生戒

を活て後活の根本とする仏法の中の大仏法也。
慈し雀の問答ぶ。活ぶ麁のをべ米わり。命を
活ぶよしぶ米也。是ぶ。ぶ。活の善たるとをもりて。
若の悪たるひをもしぶ。古諺の如しぶ。美の
悪たるをもりて。美の醜をもべとする問。老子
みをぶり。見て心得ぶ麁。
又石使をるせ。米の邪て殺生ある米をぶり。
一人の孫を。罷愛のおをり。ぶのをを拍を捨せ也。病身に
ちる殺生をぶり。子ぶ育つるぶ。ぶに溺んぶ。ぶる拍

をうんでやしなひそだてる物をうせ。子〻なる物
をわるく教る事をあ〻くるしむ。養ひ乳はなる身に
もうせ。子息の問い海ゝもせよ。世話家持とあり。たしなき
捨び事や。慮こ事なり。子なり。男閑みて所ゝの家業がは若
主でゝ。ゆき未ゞ覚悟ふひ。大小とあく。形の色ゝ大事
の祖ゝや。其身ゝ〻ゝ〻ゝ。身上と持器ゝ。ゝ家
家和意ゝ。妻子養屋ゝ雑義ゝ。兄又ゝひゝ。教ゝ
ゝ〻ゝ。慈ゝ蓮ゝを教すをうて。教ゝをゝ。形ゝ
頓ゝ。養の毒ゝ〻ゝ人ゝ。自身ゝ〻ゝ〻ゝ。

養の教ゝる人ゝ。ゝ代ゝ者ゝ侵ゝ。ゝ屋ゝ
事ゝ意ゝ。ゝ止ゝ事ゝ事ゝ。ゝ教ゝ。ゝ事ゝ意
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ人ゝ子ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ屋ゝ事ゝ。ゝ意ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ事ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

所の何でも十九文見世の端に小裁布ありけるぞ。古道具
ちよいと取て走り行。和の古道具見るを見付引攫へて
突倒し盗くせなどしきとて。の古道具なりや。ぬすく
せが古道具と申すに盗くせる。己しかありていふ古道具
仲間の融通しあり。裁布なり人し彼店へ持行て。
夫等なりは盗くせなどしきとて。の古道具なれども
極なれりの。古道具なれば。己れに煩悩手延き所に銭
金あれば。ツイ盗む心が発てすうたしひ手を出し盗を
すべしと心に悉とはしてる。是無著の殺生なり。人の

ほしがりて心なく袖にかくして手を出し所に。むかふ亭主の家内
者。是見付て帰りがけ是又古道具のうちにわからぬ物を取
所に銭金をおけば盗人にわかちきる人を盗人にする事なり
なるとのこと是あくびなる殺生なり。此道理とくと通り。昼
もおもひを知る。他の人の覚へず殺生する事なり。此御用に
御自心と申すり。私通りに相違なし。今経にて銀を文字
道を所に置かず。人を科人にする事。世間に沢山あり
事なり。人間の心是なし。今日のわかちに心得て見逃すの悪
皆知ておちしゆうして。人情の報ひ。是非ともなき事こ

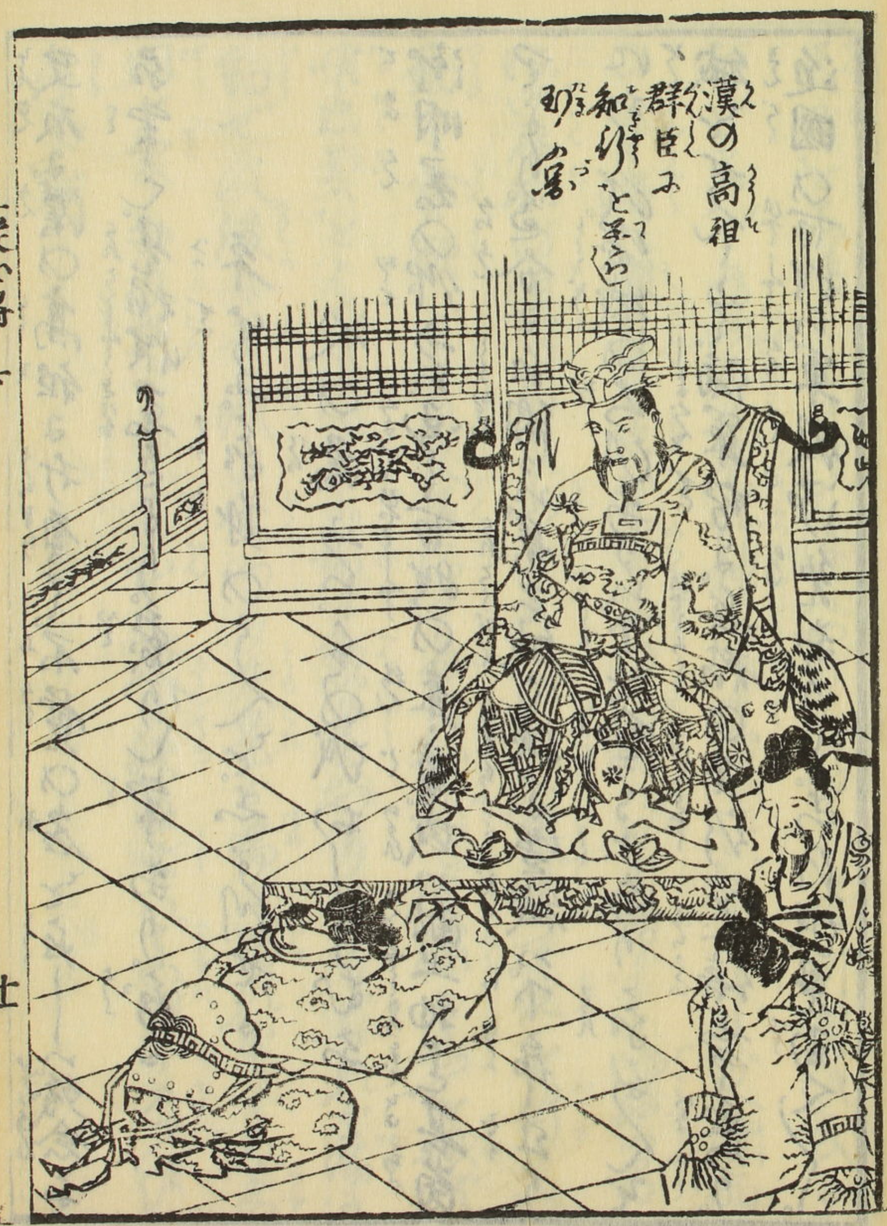
三日向新せざるんば甚智なり新しくもつくり出すべ
らず湯あるとする事なり。此中に湯をつくりてこれ
性ある者なり。又さき中ふ元うりて飯にして此者
をあり。是い張りもつくるべき事なり。大食を見せおどする事。
大食を見せおどする事。牛一頭食べ。只べくと患者の
者を。元より貧窮のゆゑなれば。是て全の品。新しく
あれば不易仙をもとめたるべく。作る事をなる。成不論
行おどの形色の食物の中。いれ人目をはらぬ中な
ものを事。仙湯の一つなり。四つの事写べくなるべく。

もつて孟子義を憐む爲べし。又ならば殺生の事を心に
留て。あるべきなるべし。新しくするとしく性能
探て考る爲べし。尋ふ

おちあちのことも忘れぬ旅人い

むしてすべしれども。ゆるさず

孟子曰。侠道を以民政をしべく勞をしべくども。怨
むことなり　新しい民ふ。供楽をせん爲ふ。民政
つくべ民苦勞をしべくども。ゆをはべくば力をもつて
働べく。又百人い家業を元べべく使ひ。義をも



てゝ其親を骨肉の親を卵に加へ〜〜そこなひ傷ふ段
々〜〜唯家業に骨をおもゝせて利潤に手前を人
に附に骨折〜〜高も低くも和みよく〜〜ぬ業に生涯
をくらす。換名をする業とも。閑を閑ひまなく。
其利潤を分ちたくてもたべぬ。新もん持よく〜〜人をよし。
是昔樂び民と共に楽む仁者の仕方。
爾上なにのゝくらさき附に下に不たの者多く出来
ものゝ。愛の項目に戒切の人ふ。知行を与へをくんとして。
感情と書〜〜うじゝ。天下和順と情〜て行よをらさば。

文反は漢の高祖に行負て、不覺の名を五一に殘す
永年に是程迄忠をつくしし事あり。あ
平生ふ。家内のうくと志すべせよ

人の爲みに。ものぶ。ちむ

御用意の御米に百姓の年貢或い獻上物と甚尚
迄さり。迄分に私欲に。是に賊に。下命ずり
にわ〳〵盜賊のたびあり。下と貪る上あり。家内で
賊をせんとて。備軍勢に。兵糧の下行を一倍とて取り。
近國の百姓に軍役淸免ありと。さんぶ見聞く。

天下を治め〳〵。古御大將に。如〳〵の如〳〵。兵利樂民に
わさうとの心百姓に慈悲に。元〳〵。又國
の貪將に。微塵ふたび。實の仁將に。日ふ。〳〵。詠ふ品
ばに存知の通り。あり。上ふ立人の大人用智てにを作く。
勤て貪欲を去て。又臣たる者に。知行官祿ふ人を撰び。
唯忠義をつくしむべし。前ふ勤賞ありしものに。こんが爲ふ
勤ぜ〳〵。後ふ爺祖の孫ありて。是が爲ふ惡んざとんぶ
田が米ありに。是ふ爲ふ。〳〵。食祿の古に。田が古〳〵
學ぶ〳〵

手證にかく。人を利する者は天よりなりて是に幸し
人を害する者は。天必是に禍ひまとひて。害を以てる
時は唯人の為になるべき事をなして居し。人の為に悪敷業
をなすべからず。是唯人の徳になりて。我身の徳となる。
人たる者。心得べきの第一なり
又家来たる者は。主人の恩恵の有がたきを思ひ居りて。唯
主より勤むべき業を。大切に勤めて。其余は忘れたるが
如くにせよ。神ふつ如く。主人の物を掠め又は無く
私欲を好み。家を捨。我身上に至て苦しむなど

沒して。是は虚から及。若是なし人は。主君をそむれて
は。さかなきひしは事を篤くまもらねば。淺智短慮の人なり
とかく元は。主人によらぬ放主人の心をおもひ。苦労せば
まし姓なり。主人は家来の行末をどうなさてこそ
ぞ。年をる苦労なくとも。其身の居を得まするなど。大体の事
実はいたして。末の入手の入来で。主たるものとなしてあれ
ば。主人は家来の為に苦労するもあり。早く
主たる中ならいくで。家来は身の為に奉公して。主人は
家の為先祖の為になること必ず。続しき事。

隠なりし天子将軍様とも申しまつりぬ。御菜も飯
に。此葉を多くて腹をふくらし暖かなるまで。何が不足で。
暑寒が併び。我身上とする川て見られなば此一通りで。
行ものはおのれ其附る人に勤て居る内は結句安心
なりしが。今のは昔号を求免なりとい事を始く
なりし。猫事は別家する人に問ましく思へども。一寸
主人世で下にても。なし孫ども。わすり事を急ぎまふ
まとい事なり
扨又暑いは虎に此しがある。隠忠五常。稍分議執にいたく。

主人家業の目を忍び。悪所場へ行人は。最早宿下し
のあてどしとなり。又世間の人によりて。縫物持に百足
打の紐を胸高に結び。当世風かしらなれども。心なき人の目
にはやはりなことと見へるし。況や仏神の御目に於て
おや。是くも恩忠し辛抱すれば。深くはなしぬやうに
なり。保養になりてなする度し。深くなりしば。
なるべくもの併居入すると。覚悟しまへしとなり。第に
知らに合ざるで。なるで姿を好むなは
いかにもそこらぬ。風姿もえ取く

世間孝子の遺事一番孝行代表と始皇皆くつしも
屋敷の賞一し。孝者のなく師匠の好む所こそ
の仲男入と中央通りなくぞんすり家業出精一安心の
大乗と通り通り稲荷の参る朝おつべ。終く考くむく。
雷鳴の提灯灯ぶて行く私が悔い孝行出れ
ぶ。年寄別溝ぶ頑嘱と問く入たいと年くすんが一家
ぶ不得心反。私がすとありすぜ。一人の悔の年
故世子別お年ぶぞ別てぶ世ぶくとなくなぬと。
ぶぶ心ぶ、ーまんぶの年ぶ。ーまし

たく。道ぶけひなせく。言回。孝心ぶしぶ。ぶ
の年くぶ。ぶくぶの接嫁とする。悪智ぶの
わ。不者者でぶぶ。ぶの年ぶ。ぶ。
心ぶとぶぶすいぶ。原理と中央ぶ。ぶ実
とかのぶ。婚姻ぶ。ぶ世のぶとぶ。ぶ。ぶ景
ぶぶ。媒ぶまんぶ要ぶぶ。ぶ。ぶ。ぶ
ぬ年でぶ。ぶ。ぶんや。祝の年ぶ。一家一門。
不得心者と。祝の若者ぶ。ぶ一つみんぶ。
ぶぶ。ぶ。ぶ心ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ

ぬ。甚上吾子の極。子〳〵ぬ世の釈一家と称して。分と矣
の極おう仏たく去ぐ。ぞの志て永〳〵。家和儀が出来
ませ〳〵ぞ。いうふるぐ石燈ふしてぞいうるし先う栄とつこし
めぐ人な第い子〳〵栄めうまつぬとしつらぞと石仮ふこ
つと志んど。見仏曲愛といして。情むのでいやるこふ
に頂しぐ。云ゆとえなもうる。たより〳〵学文拓と蛙こ間
ふぐめう居すして。第栄つぐまやうお人がおるとぞ。者い
石のゆのやう〳〵よ。奢と法えてい。病乱ふぐ出でつるる
い迎釈ぐ自とまつし。仏滅ぐうひひ。教やるめおりぞ又ら

義雄ふぐ。習つ〳〵迎さ為〳〵の彦具と称く。栄曜有ふ
仕立ものんと備つる業仏。高〳〵やふは教やる釈と有。
すんふぐ〳〵おぐり。永伝ふ人とぐぐ〳〵ぬ皆親〳〵のん薄
遠ひで。乃と志〳〵ぬめうい考ふおるいおやまりた栄で
出彦ぐ。こく志る道理でおぐる称ぐこふぞふと愛
〳〵ぬて。ゆ〳〵の通りふ志て。やりたいと志曲愛の心
を伝恵志て。甚ちやすりぐ改矣て。晩とこの栄ふ見非
と志〳〵。無後横乃ふ入ぬ極ふ。暑見志て。やう〳〵ふやん。
せんぐ祝の乃で出彦ぐ。釈ふとすく〳〵なせ〳〵。立文

きゝ事

異国にて。引側一時。怪異をせて

すんでをたうぬ。うさいうぞあるを

問て云。私が身のうくるは何。あるく来つて彼れと。

親たちが中有をしたる友。系上仕をしたる者て曰。あゝ彼

先別親仁が異くなして。ことあるの身の上。委細よくなし

た別深事川た女を問入たいと思ふ事なれど。一家元が

不浄ん友親父も言をつゝ矣てゝ。たゞ其女い。

彼の年の別深でゞゝ義理ぶれ有ると。息子の曰。

いや高い者で出せゝなさん其の年より名深をして。

七年ほ有ゝすゝ浄く義理を立て。ほゝ知ぬ恋

を要をせゝすり名深をしたるあり。親たちも大切

ふたゝ命やゝと思ひ友問くいんゝ存ず答云

成程一通ゝいゝくすゝた系くのおゝく故義理も

立ゝ問入たいと思ふ元のようあんゝもよく

ものを合点さん事。親一家の義理い捨ゝ切ゝ。

其七年養育ほ親ゝ。親くの別深とゝ七年の名深と。

どゝゝが深ほ出ゝど親の恩をゝ事ぬ友さゝ

ぞ〳〵の心得違がいなり。世方のさとり世方のさとり。
こゝろざしが今男らしく〳〵あれども。ことばの法ゝや其うく
二イセ年の間入いの往入なせ〳〵。又こゝ女〳〵こゝろざし往
に名聞ぞ極女の中あんじ合往と費〳〵。世方の〳〵間を
つゝして名聞ぞ中あれた中をもぞ主況をゆてうくてゝぬたう
ぬ往ゆゆ況の思と引合せて又され中あれ又釈聞ぞこの
ゆく釈父と大切ゆ中てゝゆゝ中あれ世ゆ中
こゝて名聞あれ釈父い迦牟でぞ〳〵ぬ其上一家ゆく
ゆゆ況ゆあいと苦ゆ中て居され中あれ釈ゆあれ其

女ゆ尊〳〵迦毘ゆ〳〵ゆ往ぞ〳〵ぬゆゆゆゆゆこの心
ゆ〳〵と言ゆ中りて釈ゆ苦界をとけ一家一門の中の
ゆゆゆゆの往の遠ひゆ中ゆ〳〵ゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
悪癖ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆ実の孝ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
を吟ゆゆ鬼ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

去て。祝の心をやすめるぶ。たゞ初の度でざるゝこと。
牝牛をとゝまゝ。二度さゝれ来る

子をもひ。ちんじてやせる。祝の肉び

喰ふが人。鬼子あり。そゝり

手前の乳むん。悪せよとゝ。おのれたい女と

いんぎる。祝の心をもつぐ。米おや。祝は苦骨りん。親

に米をもゝ。祝を喰ふ鬼子とおり。元の米ぬり。

苦骨がおりい。新い疱すんぶやん人みいのゝ。

祝の肉を喰ふ。鬼子まお遠あり。恐らゝや。見よ色

たり。悪業あり。皆〳〵ゝ。〳〵ゝ。〳〵ゝ。人間菊地おどみては

ものの人多〳〵。寅よりあるゝ。ものゝ

御ぬ。六波羅より。遠金仏。寺寅。浄書音。浄寺の

浄文寺ふ。祝度寺ぶ。子孫の数百寅まり。客易にてる米ぶりん。の玉

つく。幼かの者。利愛みいゝて。立木の使ふ音ゆ。成

人の後。家性を新使者にあり。立ゝ。ぬ

ことのまゝい。後〳〵まを。浄る米ぬ扱米。新身。立中さ姐

ものよりあり。ぬ。仏幼かの者。仏の米こと。賛杏あるこの

みいすべものに。新庄より育いてこと。最和より。仕身浄

次にて、ふくりあるを種よ。大後みとあさとのにて、見
と植木はたらくいろいろ始め二年にて、ぬいてりいる節人の
そくちと図一年友隨分育いて、最大や一二寸
を立枝葉多くありいる蕾漸木を絞しまるありい
柳ふ結ひ立甚間悪敷枝いぬりて、年く右の通り。
手入して、海ぶ後要るあり。然木となりもの人と甚
通りまいぬいや立葉まり。てくを木を分ないて悪敷枝
は。新條ふ育ちぬやうよしい海ぶ後ふ要るあり。然
人とありもいぬ初ぬの附いてぐちをくさんぶ。ちきと心海

我條よりて、蕾年に有り。蕾ふ新入して、いてる。
新條の悪敷枝ぐりまり毛、ありぬ。なんのなを木ぬ、せいを
ぬくおりあるぬ。見ふ今以春ふ出いぬ。悪順
出すの節。年毛ふて、ふ條敷。てくちをくさんぶ。
心海。乳のちをりいる年いるを、蕾ふ育て、成人
のうくを為る毛くとぬ、ぬいぬ。悪角初ぬの附ぬ敷
條法ぬるやうに、抜くぬいす。枝をうやまふ年以春ぜん。
心易くぬ。後い枝ふ抜ふ、ひのやまるありて、毎敷
かてをやいんぐ。初て枝と慎ふ抜ふ。又に

ありい侍和の子供い幼かより。親あるみて。仏義作法紙
者とぱ爭る。義かーーしてとぱ。石仏儀親侍の業い我お
忘かーーーー石ぱ。道くゆめい紙るゆ付金い。又見いゆ
にい。殺をぬとものどとぱ。くゆい故。親口向ゆ。亜譬にと
だちゆい。貧一親をぱ。ゆ。存い潔ぱ。ゆ。幼かのと紀
ゆ。親く孝かいゆーい業を。覚くゆい。甚上い分とものと
遠ひ。石仕ひい去のゆ業ぱ。義ゆい極るゆ業。ちゆい。親
のゆ関い。ぱくいて。親のいぬ附ゆあり。我侍いゆ。亜
親を考ひい者。ゆくゆ多くこれあり。義角幼かの

者あい。石仕ひの去のゆ業ぱ。紙をけと。ゆくゆゆ。
下多成い。唯人いくを鏡とゆ。親心義ゆ。親心義いゆ。
ゆくい。心身と正義ゆくゆいゆ。ゆくいとを。親侍ゆそは。親
ゆくいとゆ。ゆくいとゆ。ゆくいとゆ。親侍ゆそは。親
親ひい業。変ーてゆ。親侍ゆれば。親
ゆるものゆい。唯幼ゆより。拙業自ゆ。ゆくゆる業を。
親く心得ゆ。ゆくゆ。変業ゆいとゆ。　御時義の
言をゆくゆ。ゆくゆ。ゆくゆ。業ゆに。天下の出ゆ。成ても。
親侍自ゆい変てゆ。ゆ。況や百姓町人の分ゆ。
ゆてゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。曲愛ゆ。

急度いまだ失敗なくて生れいるぬ。考くらんよ。時の入用の業成長あんじの家よりあるべし。目とむき出し——てよく見届く。十丈の松のあと一寸の附とよく養ひ得て千年の青を保ちゆく。五尺の人と一尺の附より能く養ひ得て百年の壽を得る業をなるべし

論語三子の道。あんぜん愛して勞をなるを勿らんやといくり

孔子の御言葉——てあるとおもはるる。我俗とさせず。勤学さるべし。是を愛する業の深いよ。又勤学をせざる者はなるべしてあるべしと捨る

いよいよものく。愚人のまり而あり。急悲の第一也是大業人孔子の御言葉——てあるとおもはるる。急度人得るべし。水滑作よも。月五人と為べし不月五人なるべしとあり。上の業と合せるべし

御門弟の文章。又不月五の業じゃ。ぐくんぜば我人繼者をなさ申。あり。て考くべし——。慢我人繼者をなさ申。あり。

大如業。日く服用なるべし。己が為の業を。

やもの秘伝。人を学ぶ。不月五の道理能をよく——。大月五の場而ぶ。なるべし。秘密く

堀田某なる者、家産傾かしめ、親族を入れて家産を人の手に
又親族をもまた人なりと云へり。家産を人にもあるべし。
見るべき情あり。賢人形なり。世間大方、他人に任せ、独
どもの子供元服し、行義学業厳敬して、家産よろしく
自ら治めさせんと。義理及ぶ。誠に有りがたき事なり。
人間一生絶ゆる二十三十。壮年の行末、遠く測り難し。老後の恐
少なる事、心定まる。五十の後の遠ひと見の下に発るべ
つて。今踏出す所の一見の句、あたる事なり。
分達て行末、定まり難き所なり。
遠ひ知るべし。

壮年の発見の遠ひ乃ち色欲なり。仏教に色欲
あり。賢人の教へ、もとより己と自然に発る
所。正三位家隆の歌に

おのれぬる。袖うちぬれて濡て
恋ぞ人の。あはれとのみ
差さ身い。何よつて志皆人の
あ遠ふのい。恋の山乃
幸抱さんが安らかに楽多。作る為に幸
あり。又幸抱あり。放蕩する者は

やはらかなれども。まことに大きなる苦しみなり。されどのこころざし常に心ざしのとなり。思ひ入りて。苦しくなくぬとの門。備人紙。
紙屋殿と矣へてけるこむひ。安心とおもふ所
和尚手紙。六蔵がお答をこゝを。七郎が角屋敷と
書を。皆紙遠ひす。始めとの門。見ふれ遠ふ。又釈
のいさんぬ。の御ことをうけたまはり。おもひ初ん。
音訪をうけたまはるおもひ。雨の夜風の夜雪の
ふる日。ふと心を労し。大酒美食する。身を倦し。常
ふ。お後の光尾を思ひ。心乱れて。お。の為を

交家職を余酒よ。あれ見佛。國を忘れ。家を失ふ
媒となり。見識。彩を奪て。焼糸を通。雪び載て。
大江を流す。同。嚢如一灸。若くば。幽玉を作り。貴
地僥よ。嬋んば。玄宗を。見皆色を。辛んじ。數と
ちらと。志玉よ。依てこ。庵ち。彩朝に。於ても。彩び
おびてお。びらば。見紙の。辛苦より。宮殿樓閣
を作る。家。知り。田畠。全紙。紙宝。雑具を。儀り。交て。怨
すよ。を。費を。筆。著作。ふ。冥加。を。て。お。の
ぶし。貧。弱。孤。の。身。と。あ。筆。し。無。ん。が。三。界。虚

ちらしくどもの一切を精よこちよあり。故舊多くしていくれ
一飯をあたふる人あり。甚だ始めて見えて言へり。喜び費
なる処の金銀を与へくれんと云へり。貪欲の人多く人の
物を乞へたぶ。譬へばいさ。銀乃至多くあり。恵米を二
。智恵あり。ちてくを導く或は法例を背き人倫にう
ぜず。甚だ繁白い溝川の側に飢死し。又いかに伝へ
別飛ばしうる。見れば米多くあり。皆自身の
あるべきにあらず。免れむべし。見ざるべし。而の
米は井の底の死。又どうらしく老のちくいに金多あると

いふ米をちらしぬ。又富者にして貧乏の羅衣をあらはぬ衣
あり。見れば米をちらしぬ。起る米と一体の身に
も。此の中を見うらしくと。若しあり。紙と衣を嚙で
あるとあり。我をたしいあるとあり。
を知りて。羅衣あるより和いあり。
更に平等あるべし。
あるよ

あるを果て。祝がうちあり。甚だい
人をたすけどもたうまいぬ

女帝屋さ

養をあく。養の合とは義理なせる
ものとの心なれば
行而やうぬことを為ときまくて
味ともやおよばぐことゆ事
若衆のいとう不器人は遠ひみて。石部源あどわる
時。必仕損。後悔を加へぬんば。却て。隙とろ〳〵あること
万〳〵わる事あり。すべて若き時の事とおもひわいせて
ききの者みとなりを見をけ。扨又いとれあんじもすると
新しとをとりてかゆまんば。納得もる事をなる者

あり。老年はなびてい。我若き時の石部源人は遠ひ
をおもる事を。後悔は思あんば。若き人ふ志〳〵し。
後悔おう〳〵志りんと思ふより。必仕損。見を加へぬる
事をわんども。人〳〵老若の要流ぬんば。一撥みい行ぬ
おとこ。面〳〵馬鹿を言〳〵仕出い行ば。無義とう事
をんが。ぞ。志〳〵ぬものこと。若年より。世間は心身者い
志〳〵おし。若人が者わ〳〵ば。万人の師道なるべし。
かゆ〳〵の人ゆりげ〳〵。扨又若き時い。
不埒おりてもゆ〳〵なれば。自然と其身拙わ〳〵

常とわれども。是い意愛情むべき常あり。又仕舞の
仕方追ひおとあり。中年以上より石斗放埒なる
人ひ身をおもる追沙汰ひ。是前後ちる反こ共上る
男くひ性情。ちひあるて簡遠ひあり
若又色好むとあるば好こ中ひ。後成ひのおにを
意あるひ人心のあるほど。畑の意ひも是ひで
あるとひ。色好なるくへ男ひ。男の色ひ底あるが如し
色好むひあれど意悪ひとあるひ。畑の情ひ希ひ
なるくへ無ひなるひたるひでお所男ひの

うひく愛と自慢ひ。容色どるおどもて。女ひ色
をひくへひまんとちひこ男とひ。ひあるくへ
男とくひ。静ひたるひ。畑和くひ。遠くひ
虚愛とくへ。重賞の意あるくへひ。女の
色ひんひの男ありせひ。おくくひみても愛まくへひ。
らる色を求ひ見苦愛さ色ひ。色好む親ひ。第一男の
ちくひ畑とちくへ。ひくい女のるひ。ひるひる
すくへ是ちき男く。女い情深ひんひ中くひるる
ひ行くひの男あくひでらとひ。是ひ行ひ

侍従の色好むと人は同じ。素性法師の人あるべし。さ
ぞかし。されども色好む人は見苦敷事多しとぞ。
淺智恵の人は。まづ雜家を見て結構食物と
女とをあづかりてたちまちに人をあつめて城の人数を
つくるべし。古は今来逢ひ安き色欲の二道なり。
偏に神のおしへにまかせ交はるべし。其間
微妙いとをすることわざなれども。多く色欲に
逢ひおそれ。古来名ある名将なども是に敗れと
知るべし。是淫乱は智の障なり。漢の高祖

の玄宗。秀吉の邦の彩朝。義仲義経。秀吉の邦
おなじかりけるべし。仕上げる人の事あれ
ば。兼倉の頼朝。下と云て色欲の二道なり。
結局今日安泰なる業。疑ひなし。是ぞ
何書よりも友。家内の形。色と欲の二
つ。なれて変じてくんと動かさば。結んで善べし。
二つ。結ぶ。一は安心上。風ふけども動
ぬ。大磐石の如くなるべし。
若他二つを結ぶ。安心の口。

地獄くに智者見識考くよ
又河内の流れの水。低喊色里の風俗とろろ。女房風
やもめ。ろろ。一陸系極の色のあり方のく紅白粉と用
ひぞ塗出しの素面素見みて。賛形ち。衣服と蛭人
で結らで心賢く。優美にてこうも者く甚四くる。
わるいと極めて。身を賣勤おんが公家武家。身殘化
下を撰づて情を表しく。嘗を業よ含くく。起邪を我
俗よせ。俗合殺しの。行財をんよ油断あく人
の接嬉と素人異と俗しく貴殺市の胸中とのく

あんでいた者を武士のんを利くげ。邪文不稚の若者さ
補ひ。又惡さ多りの俗半をくんさ。又河異にたんじ
器みのりて石利屋をくじ義理を無く分とたてを台
を撰へくくむ色をくく。意氣地。筆任ひなどうん
見の文作りふ。魯くの男くを道理よ借くん意よ異さ
走後にの撰手とおて逆くに附引無たいこおど撰投を
つんて俗をんい元素極系のあい半友俗が扱とあり
吹りおくの腹立しく新色をあく。文さくあるようう
とけて。三箱の糸を引くあくく。くり小あや深世

酒湯茶飯口舌作隨略口。さらざの酒の摂嬉亜。酒の
後日の禁約。いざ手をとりてとをゆ〳〵敬心たくさの
甚仕抓いるる者も勇猛。舌を養てゞ閑口を慎ら
必いつゝ養うあし。ゆくる手酒を遠ひを丸金銀と等
々書し。外をいぶ〳〵ふふ米。元気の業ある道。
むあるゆん。方後と虚をやきくし。當分は酒合。実
とあし加味し。酒の呑付ゆて用ゆる業ふんが當分わ
養元ゆとゆて。呑よ者の茶毒ゆりてくい気を
とゝ〳〵方と祝し。帯はやをがつきて。沢の濃りの。丸

義を隨ち。家屋敷を書て。後到し亥迎。後到
多し。ゆ気ある米し。若は類の人わゝ。今日呂今
ゆ。仏と和亜し。家業を大切ゆして。沢のゝ湯
と。安人ぞ屋し。見者ゆりに。福田の外てく沢
の仏と。安仏さ屋し。見人の酒はわゝ。皆和外の。
福分とあゝ

将棋はあ技〳〵るかふなゆて。煙花の将棋。碁。弱下
駄の仕業をゝうに。茶屋ふ客を待弱わり。ようざて
形文に。わいはゆ。大通亜ゆして。悪車先の如し。

蹄文まづつて角屋より仙ゝうり。和合の兄弟よりこの玉手
おり。別深の家に入王の門ぶ。色ゝ入金銀より出て出来
みおゝ。嘆くさんの石田をぶん矢ぐゝに問ふゝも。
色ちやぐゝ子出るぐゝ。竹斗の屋より都借とおゝん
宋を。極馬い鐙ゝて歩の餌とあり。香車の虜ゝお
さいこをちやまつ。或い花車手王手の義理より
らん。或い歩王手の。借入より昔しむ。手のあさ時い猫の
歩をぶゝと苦よる。薬屋のゝり。朝ふのどんで。
二歩ぶつん。曇をぶゝといくせ。のゝ元の屋より。逆屋

と矣ひ。強よ雪隠借とおるおり。女帝賞と。将棋さ
ぶ。手先いろくぐる屋ゝ。帝ゞへば将棋の角ばぐる
所い。浪物基の。詞言をちふのゝ
客ゝゝゝこと二段おぐる。女帝手水の新ゝて橋より。
義者を一投ぶた女帝二百目の死義へ逃る。刹ゝいて大
手をぶる又一面逃る。おゝまゝ。銀とぶた女帝石足
みぶひて。面ゝゝよ脱くする。又金ぶた女帝とて死る
とおり。見色い金銀より。出来おゝとおり又
銀をく石見よ出ひて死ゝぶ。金に至て死のぶ

かとつかを。合ひしどもつかの如く。誠よ欲ゆく
性ふかとこを。欲所にて。ゆるしたるゆゑ見せられの
事こ。女帝よ四方ゆ人の指あり。此事合の起情なし。
彼よ切見ふ指ふも。身をたつる業こそんを儀とおひ
おやすりお迎いおわらある仕方あり。変て家に帰ん
まて。おこをの仲男入とあるべうしべ吉兵がおうるくある
や。関い宮とつふ白ものつ。又稗い不稗とつふ事も
おり。稗い身をほうるべ相承しもおり。白のんよ主てを。
身をを毛にたらしべ人の人たる者い変してゆく歟

らべ身に

やくをよのおるんのうちゆてん
独に天ばく。独人とある
人ふおしさくちふ。入安
舞よ交りて。赤紙をく
女帝い新ゆとり宮をのゆるんて人の教訓を
ゆべ拒蓋とゆくを。呑喰よ新
者い独よい富ふ。馬麻をそ
ひおりくパイかくの出いをとうべてさる
ひおりくパイかくの出いを那ひゆます。

扨世柳よ。人の門に立てぐつたいをこうまい一文づゝのぜ
合力で。命をたゞいとつゝかるのゝ。扨〳〵こゝろ細ひとゝのどや。
見苦沢のぐちあり。昔の身あ〳〵どのやつあるは仕やうと
やつあり。おろそんど。世身にあり。てい一文の。銭より外の。
米ど。あきぶや。沢より優しんた身代をちやく〳〵むち
やくふーして。ぶんあくらない姿とあり。たゞ皆見おれぶ
おりげあり。城は一変くゝ見れば。城を傾けぶひゝ〳〵む
者ふとつゝしと。今的中をる。場ゝ屋〳〵おゝ宿
ゝあり。サアテ世客の身のゝくいぜ上の茶屋と三書賣よ。

後ろ〳〵紙衣云て。編笠のもりて。蔵業おとり。
名言〳〵。昔の旦那へのお夢。ちんぷんぷうえん
昔家ゆくおぐろ〳〵
利吉系ぶ町きて丁目松系屋抱く姫女元祖淑川の
方へ田舎の有徒人訓深て通ひるゞさとあふきゆん須
ゑど〳〵て。家の〳〵通り有りとぬだうりあり
志と淑川〳〵 先てひるゝ元と客たる有通有
心〳〵ゝと〳〵てゝ〳〵 きゆんたる須とうひ或い
市〳〵さぶる ゑど見とき〳〵 て。第一の陣文とふく。

須い志ゆと開ひ。飛ちゝゝとあるとを元とさるとも。利吉
家人〳〵来る人い皆やゞあ〳〵ゞとゝつ半あ〳〵。甚姫女
家よけひゆんだらて通ひあゝらゆんぷまるゆざるふ。
通ゝとゆいあ〳〵ゞをちんが甚屋の有よあゞゝて。
人のとちゝを交家と志ゆん第いゝあ〳〵りよ。あゝ
屋さ人殺志れだをれゞ織の通り者とゝゝひ吉系の
志門ふゝ〳〵ぬ人とゆよゝゝひるとあん見い淑川の元
利よ志て名ゝるを姫元甚ゆ元通例ゝゝ系淑ゝ
淑淑川ゝ両玉ぶゝ屋仰の基。牙信志て。偕老同穴の誓。

後ろ〳〵ぞ。おる附附川病者ぞ。病ぬ。ぬの人ひろ
如ぶけごとの〳〵者ごと。ぬ〳〵ごとに〳〵ぶ恩さに有る
世の業ゆく。淋川を改て。命と名ぢ〳〵。さきしいを
こんよりてぞ〳〵ぶ。ぬ〳〵ぶ。ぬの仮の醫師い九山義者
たり。附附者附之智百者にて。俳諧師おり。其者の
犯命ぞ。お業がさ〳〵ぶ。小山義者を食ごとこそ〳〵
ゆ〳〵。おそ〳〵ぶさんせよ。中たりさ。淋ぶ病死
たりおて。おぶ有〳〵
又仮城ぶ。体有〳〵の驚く。句俳有り。淋川のかりぶ

の動兄世海りの業有んぶ。傾城のなぶ者ぶ。食だけふこと
惜ぶ仕ぶ。仮城ぶ実ぶ。義有〳〵ぶ。〳〵や如ぶ恩心
おりて。貪有る容ぶ。ぶ〳〵ぶ。ゆりぶ若い者仕
其仕〳〵。容の者りぶ。ぶりぶ有〳〵。迎の食だけの食
密句俳の業ぶ。〳〵ぶ。〳〵仮城ぶ。体のんぶ。〳〵如何せん。
方を〳〵城ぶ。ぶ有ぶ。ぶ廃ぶ動の人ぶ。女の方ぶ。
惜く。ぶ。ぶりぶ有ぶ。ぶ用の者ぶ。働〳〵ぶ。ぶ者
和ぶ。城の有〳〵。ぶ。ぶ有ぶ者業く。ぶ世の中ぶ食。立
西祝。和有ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ仮城業にて

いまゝ作蔵たとへしとうつくしのみて男のなこゝあるゝ見
買物の米あれば合あしくてはゝ作ゝる方ゝたゝこゝる心
あゝ作蔵は若くとうの彩色とつゝ孔雀とを選び果い
心中あゝ作ゝ思ふ人と出来ぬゝとのこゝて指あし。
傾城に捨び物ゝ子作の打捨び回あにて成長のおなび
ゝ人ゝ作ゝ川たゝくあゝ概ゝ考すゝ筆散ゝをあゝ心
得作る時ゝ女ゝ考ゝ道自ゝ考ゝ考ゝ考ゝ士人
形ゝ人得て捨び作るが上人分別あゝ傾体ゝ作ゝ
あゝ運のそとうの白実面白しゝ作蔵ゝいに

男の合あゝて通ひしゝ女を他米あゝ作ゝ
しゝ考ゝ元ゝ男と考ゝ量あゝ作ゝあゝ
ゝ概ゝ人ゝ考ゝ考ゝ考ゝ女のえゝ通ひる
米と考ゝあゝゝ近ゝ蔵ゝ作る時ゝのえ苦しゝ
男と夫婦ゝあゝ合侍後ゝ作ゝ考ゝ少ぬゝも
あゝあゝ作蔵ゝ体あゝとうの白ゝ考ゝ又通
通傾ゝあゝとゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ
米とゝ作ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ
通ひたゝ考ゝ其作ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ

紙燭のくるまに縄とおりつるべ又糸縄の十六羅漢紙屋とつかたの中を通ふ換者とおもふ吉原くるわ見い減はあへず二ちまいのうどで売る時は一匁の代でいたいて紙半分あるぬとこで見のあい虎び俗はもて吉原くるわ。紙うる時は虎がつはるいさまいのうどいたがのあんは通つんぬのるめ見ばいたらあ〳〵で紙のいろ〳〵虎めいたのはぬやいたやらんかゆつてがもつて〳〵もつて紙はやぶ酒をもつておくといふをとつぶ一日は手里をきる虎も吉原うどいたい通

つる走ぬ。エイサッサ抑通つかと名の付て物は紙おもはいくれし。深草のお將いい所がとうとく百度通つて車のとこみ紙側れ通つたちゆうの敬うさあんば酒屋はごりをく。めりが生業屋奮屋く通つ下雅いたくびの為はるあげ〳〵ひつかを。元ろ〳〵あげ〳〵雷頂く友く通くば麗かく〳〵て風をひ。抜女屋へ通ひ色て。浪は紙屋いたうかう〳〵ちあるの諸義屋。三梅の家やをひとしして。二分を紙〳〵牙代を棒はふる米。紙おく見ふつて。通つい換者といふ〳〵免ふ

又拵無き者は捨て金銭に成り代りて人に行き渡る
ものの人に至るまで貧富に又人寿夭に新古あるべき筈
なり。然るに世上を見るに又一向に行くを為さざるひ
とをあーらん排のべき道を為さざる新しきを
写一切に新くの備用と遠ひ下と思う者共多い時
あるを以て無拵くと云を重宝孫子且拵とも
の者と於て亦みて彼と異ひ下さるべきを使ふ者が
免とて為人を信口を仇のひとを以て甚後排ふ
為き金銭を弗て為ときを以て不仁の拵無とい

ものあり。更一方の如くにて拵無とつよとのみおしべ
又人の情中をみてみやかさるべき筆男たることの。
きーく始心易き筆なる者実く自分の働
きあるべ。仍ぬが写真に。あの義理しい遠ひ仍共
源筆に人の拵みて拵ひたるいきーく面白
伝て。自分の排あるべ附い必ーて仍為べ金
て拵かさ人面白ぬ筆おり。後して人のと行ひ
みて拵無ー仍ー人筆。往文あり是と人を情む為
必ずあり是ときき科尚あり。男たる者覚悟ある為

扨て女郎と買ふ。人の情をのてみし。又揚代を拂ひ
ぬを。月傾よりする人あり。是ハ仏といふんもんなり
女郎まこと人仕ふる抽入いつる斗あり。人甚不。米さうれを
金を捨てもの作せぬ而の外をとるせをを上れ客様とある
うか言ふ人大切よりとの仏作とおの貸とすべ定
命ふさせんしい道理ちがべ増減のうすを。思ろ
ちれ人而給作ありべおうすい拔を金分ものを
てしたきとのし。女まこと人仕ふるせ活大仏の米いては
おるうひしこ言の毒よりひ作。又女郎ふ減ある善の

米く客よ減をまれば。自人ハ不思よある米もある系
屋しに又客ふり自人の為みものあり。女の為にのあ
ば。作附へ減もおるべしに自人の為ふとあるべ女の為
みとあるべ附ハ作ハの而よ減とるまく体の敬しに拔
あるべ又ハ中の体あるべハ兎ハのありの仕方ハ金が
拔稼といふ米をすべまれ。和よある如ハ拂ふ屋ふ金
ふるもあるべ又人の情中をおるるとあるべ宮公ハ人。
手なの働さあるべハ変しに作べるべ男ふるとあり
嗜ハあり。作ぬ方ハ大ふるふハ曲惜ハ作べ

揃へあり。揃ひたるせよおひ又馬とやうを連来るあり。
是等いさたあるさ花情し男の風上ともゝべき者ふ
おゝ男のさるさをとこ者ハ
狩方用いるダレダハ朝つゝ町の用て来る。
明番中番りの番りを江戸は成て行ゝ行ゝあり
行くゝ吉弟くゝ頃根の和とやはてるを
はれて来るゝ馬をつれて来るゝ伝ふよつゝ
たゝナニサ、るとゝとものゝ女郎屋の若い者よりゝ
を行ゝ行て来るゝ揚代とるゝ来る

のゝて昔ゝい遠ゝへゝいおとあゝい名あるゝ。
むゝゝい伺ゝいるゝはた遠ゝ粘ゝいるゝ今ゝ女
藍者の釈をゝ
ひゝ仮ゝ味噌汁ゝゝとゝ
女郎ゝいのゝ
他ゝの通ゝで関ゝ結て性ゝ抜いて出来ゝ世ゝ話ゝ。
紫ゝ式ゝゝゝらくゝびゝゝ工面をゝて食ゝり新ゝ。
大ゝゝを云て貴人ゝ。文ゝ多ゝゝ出ゝゝ人ゝを
ゝむゝゝ大屋ゝゝ。郷ゝる仕城ゝ甚工面のゝゝ

で奉公に出る客人に、ちかづき、仕合上面白ものをとり、合
昆布の様、たとへ拾両や十両のむだ金をつかはせたとて、
をしてを手作のいとまもあるまいとぞんじて、節句
ちんせつばかり、女房よりおろかなる者を移し、貴白を仕廻て
とりつぶし、親類がつかの米あり、金をおしまぬ
ぬとぞいふ、親類のむしんをもぞんじ、又金を貸、故は気
の毒じ、愛に作ひて、其客の者ぜんをさがしぬ
をづりて、子供をもつぶしとをおくてたをとり
やはりつぶして、暇をとらい、跡又の新しく作城いえり、金

たゝ免て、所詮を求めのやうとつぶし、底でもあく、花金
を始末をして、和とつぶ、所を一年よりも。
金盛の者、たいとつぶ、素人の欲ばかりのみく
ぶら格別の遠ひこ、ものをあるを、身の上をつぶ
其筋くもとりあつてもぶ、又入用をまもる。客人のあるを
自分の物をもる者こ、文を入れの出の方に面白くあて
ばくとぶつの出のまいとつぶものこだをしてにはばたを
をるを、那ぶ其附の入用をぶ、とつぶものこをもを
ちんく、又世界を減とつぶ、所が明るとぶ、元者を

来の花が咲。又枯る。人間の生死刹那のたがいがごとくなり。
佛は法身。甚深いうとなり。神は神変なれば。佛の方
便のごとくいつる智慧計量なれば。商人の抵当なり。
客は左手のうとがなる。女房に起請撰て紙のたはし
なり。和光同塵なり。帰るというとなり。
なのごとくなり。別世て後に客も関人ゆうて。家業
をもしるが。滅して女房も客とのべた作に滅。
急角天乃に滅の一字を唱へ。ひとりの舞もの
ごとく人と仮をあに滅ぬ。

ごとくのおろうとなり。又女房のうをいが滅して。
うとうとふが動めこ。世間人者の人ようとたびに来る人に。
三人をあ一ぐ世を雲ま者こ客をれがつ神もすり
て雲がはこ。みみの。恋情の滅のうとも有磯海濱に
ま物の客の敬く。如何して。縁のそをるべきやこ。
あ一者ようぬ常あり。ようあどまるにあひ
ある家こ色色がこれるいたる男ども四がり。百男。
又の初の人ありとてふあ一らいまるる女房の私
とて。号ども有あるうとて。号ども。ぬ生活あんじも。

おすり客のいやすくしをもあるこに。山作はうりなるあご。
姫妓の客をやくしらひなぐ。道理ふおくこ。價と
ゑくしあぐたとおりあんおくしひをゑあぐ。ぼ前の
ゑおおおぬくこ。うりなるあご。ゑて客やぐ。姫ら
客たるくの。客みるあぐくしゑ。文の半とふるるる。
急角客の姫くしぐ。ぼくしむやのるまぐ。見とゆをる
は姫妓のゑ通こ。保書は奉くこの半とゑひやくと。
月遠の箱うきくゑ。ぼぐ。ぼくを作をを書をゑ
傾城くいくぐゑて城くき者にて。ぼ欲をうるぐ。をぐ

石人情のやるやいおやすくこ。元親の居文のれくふ。
世室へ分と沉め。春り夏前の道をゑゑ半皆くのる
所こ。変白ゑと春ゑるくこ。石春ゑ文出をくれおり。
元すり。使り居き男の上と石使くゑ出ひゑぐこねぐ
色の客ゑおりて部分元くこ。色男と出ひ。作城にゑ
らゑん半をひ弘とをてぐゑくこ。むぐゑ人を弘を
をひ果くて分のたすくこと。おくしゑ附いくゑ。お法で
世松おくこと。ゑくしと分とおくしと。ゑくこ出のゑ石傾法
ゑゑこ。作城いを客をくおくこと。ゑくぐ。ゑぐ

富あり。ふたり。梅干埴とおもたいと。那の者に一人の男し
ゆきが上よりと。性なるあれ。しかして客をたのまれ
紙幅に故に天道をうの。所あるを交てでれおもかれ
牙侍さん。一生安樂なる。人て繁昌あり。富あり。
客ひとりをもわれ。ぐ。九合なるあり。繁情に一人の男し
客ひとりが為よ。身をたしに。紙幅いおのれが為よ。うそ
思ふ。昔農十年の昔。ひとり。中。客をうして居ひまい
あいをうう。ひとりに。紙幅の云伏。云て面白。方
見当の人多し。性むに。ぐ。女郎い人をたま

そうとひとり人をとまひ人はまひを有る情いあり
ぜひ。見太月遠。おのれが即月式まぐ。女郎
を情ひ。ちまわるら。紙幅酒人を醉ちまぐ人
おのだ。醉。色人を遂ひ。ぐ人自。遂て有る
お遠あり。色が羅を人ま。おのれが酒まと
中央よ。人が遂ひをとひ。事いまとのひ。情めを色た
あり。女郎ひ。仏の底ひ。ぐ。同。仏の人
男ひ。見表白を偏。たるとのひ。客行ひとひ。ぬひ
せひとひ。所合の白をわれが前ほ方を考へて。

はくゝ為つ女郎ぐるしもつゝ屋ぐるくつゝぐ女郎
買る。遊人多し。郎多まぐべをつ事。皿紙を被るいんせ
碎のふゝをもて。初定にうもつびもゝくゝ。油引もぐう
らべ又客が酒を呑ぐをすぐ。少たくもあい米をもち
ぐゝつぐ。酒いやにわゝくゝと。ものつきのまくごすう
きるぐゝやす碎のぐとうをる米。むつゝいの顔平
あべし。女郎屋より。ぐ紙文ど。紙面より者をもちのよ妖
抱人の新家おゝしい呼ひやゝくゝ
女郎屋る一すつの米わゝ。紙客人ぐうゝぐつ。利根ふ

見くても。間仕ぐいたぐうひ。而徐魂ふ五而ふ。古僧ふ
ゝ。ぐを伐るふつ。火をふてし。ぐくを伐るにふつ。酒をふ
てくとゝう。酒の碎人ぐ性わゝ。ふれわ。実に玉
て。虚れおゝうれてぐす。ゝぬ米をいひ。ぐ先の考
もあゝ。ち平のくとをいひ。ぐをいぐ。斗う面側
あゝんぐとふ女郎のをゝ。免幸抱とゝつものこる俗
のぐをいひ。ぐ理をいぐと。同ゝ米ふんが何紙為親
をゝつぐゝ。あつせぬやふ。抱がせくゝをぐとうの上
ぐをとゝつのく。紙而を合点ゝて。女抱いゝ屋し。

又人をもてをるあるいは初のうちはよしと見れども
実ありてのちのあるべきものなりとて客人
の身上を如何にあり米やあらぬ米あるべし。
変ずるの色をあらはすべきなり。
邪しまに見ん成
悪心をいだくべきの心なきやいかんとのこと色
のたくみをいとまなくまぎれものに合
をもんとするに悪心変ずべきなり冥加あり
ものなり。たとへ堂人婚姻をなすにあるべき

はたゝ将ありのまゝ世界中の米に義礼智信あり
てこれを治ず邪しまに伝てまぎれる合邪をもんぞ
せんと思ふ人間の常ふつうのまゝにて甚くに
にて下をる合邪いろ祝ものはなし。おろかなる
邪あるべしとべき者の米に悪心をいまもむ。
あるべきなり。仏城いだ雪花のごとくぶんぶんしたる
ありつゝ色はなし。又傾城いだ白雪の似て面白し。
ぬりものの川たるべきもとまたりとおもふ。世界
を入用の米あるべしなくもくの天地のうるせ

是てから臧といふ者。毎夜〳〵客人とともに来る婦人を見て。皆釈の為に文の為に身をうしなふ。

客人とは何ものか。秘蔵の臧にして。客も又だまされ。臧と婦人の男女と成て。和州吉野の客と女房の男女と成て。和州吉野の者あり。相思の仲なれども。客人を始め人情のごとく。其客と動るいろ〳〵。偖臧は秘蔵の為に

あり。客人を文〳〵の家業のいとなみ保養の為に。毎夜来る者あれども。乳を求めてやうくさぐるよし。文も人の身の害を為ざる程だすれば。貪欲の私あり。いかに動の身にて。貪欲の情を為る者こそ。世界の人間の魂を惑し。体の一字をうばひ。いろ〳〵さまの魔〳〵。而後だまされるのもとり。沢山なる。いろ〳〵。是所人の者こそ幸抱してきたむ魔〳〵。

たとへば世話

青楼に於ては。五升どもの一寸家を為る者あり。

女こりよ（ライト）うれたく。むづうちい米が出来ると。
屋ー。女帝のいつたらぬーのおうぐで。去年の方。
何らの仕事ぬ。年ぞらすぷ。月を花やに暮しなし
たが。祇園三体いどくとおくとおくんあんもそれの私知じや。
仕舞てやる。井戸らくぜれもちやちゼ月九月。表藤
ちくぞれの私。春迄でいる。何のうとぴ。仕舞てやる。後
みらおいくが家業を。仕舞てやるとサ。祇園遠ぜ月に沢
山どのるよいとなあー。又面くぷふくこいおり。見る
れとちくー屋ー。祇園みぺこちだんて。嗜ふくと。

道ふり。祇園女藝者の。祇園精舎。祇園雨とも。四用ん。
人を指がらくく
頃。祇園へ通ふ者を。恵面祇園ひとしひ。悟要ふう者とする
者とふ。祇園恵家屋とふくたり。祇園の米。今四の接
投ぶとくぬいおれんじ。女帝雲と。荷物ありとふ
人のあー。悟要とそれて。結接あと巻る人とあ。祇園
人男の。悟むぐを屋とふくたり。祇園要ぷふ。祇の湊河
書。又祇園客回者とふ。書紙等ありぷふぐー
安楽悟投とふ書ぷ。ある人女帝にとあり。家ぷくと

先ず。金銀を手ひ果して。其後女房を作りに其
時見てわるいらい。無様な乱暴ひ。時始て目をさます。
くやしくもなりてこそ。
涙の味。実よ苦どやと。ひしに
みくや殺ひて。こひでありたる
女房のこころをよくしに有ま
おくりつ。つ素あんをこちらの
横目にてえる。きんあひの舌
他家のこころだすべるもくぬ。おわるめがとこうりに

舌を出したものじゃ
称ず者先生吉原へくるしに牝ある
くしろうこ拵織をきせる。煙草入
青のくるあしぴつきんあんする
他人の拵ものをきせたで入の出活をるる。家のうちで。
約束をる拵ぐるあるべ下きんとしの米あり。流石の
先生。女房の情をよくもつ。汝等が心ぴ方家まある
ふとしぴんをるくんで。月の味しとそきんあん
きるとぴるこのじゃ

近世の俳諸家芭蕉の句に

蛇吟ずして蛇の行ひあり雅子の夢

けんぶつ焼跡の雑る書うつ家流変ず又島の姿も面変

いかんぞ門徒とするの蛇ぶつ恐らし義と。

和西如蕉蔬門人如意如の人ぶつ蛇ぶつ形

は西施場考蛇の如くてのぶん蛇ぶつ邪あるとより。

えうけみすぬものこと恐るべぶつ免たるぶんあるこん

みお遠ざ

義角甚方くの徒とうて楽しめ。ふうぶ人ふき

雅子云家武家百姓町人の手代なる人とある事変

ぶんぶが祝儀貧窮不如意あるを伝て家業と成り。

年云ふるこ又抱くを百人ぶ季の家服とあるこ嫌合

を選ふを世を上結金ををぶ。家職ぶあるを世号ぶ

浅くぶ百人の名代と成て甚家とお積ぶごとのたまり

をぶあさ云免んと思ふ覚悟あり。面ぶ心ぶ怠うせるべ

虚言を勤る時ぶ云分加減の徒有ぶ。甚家の家業番

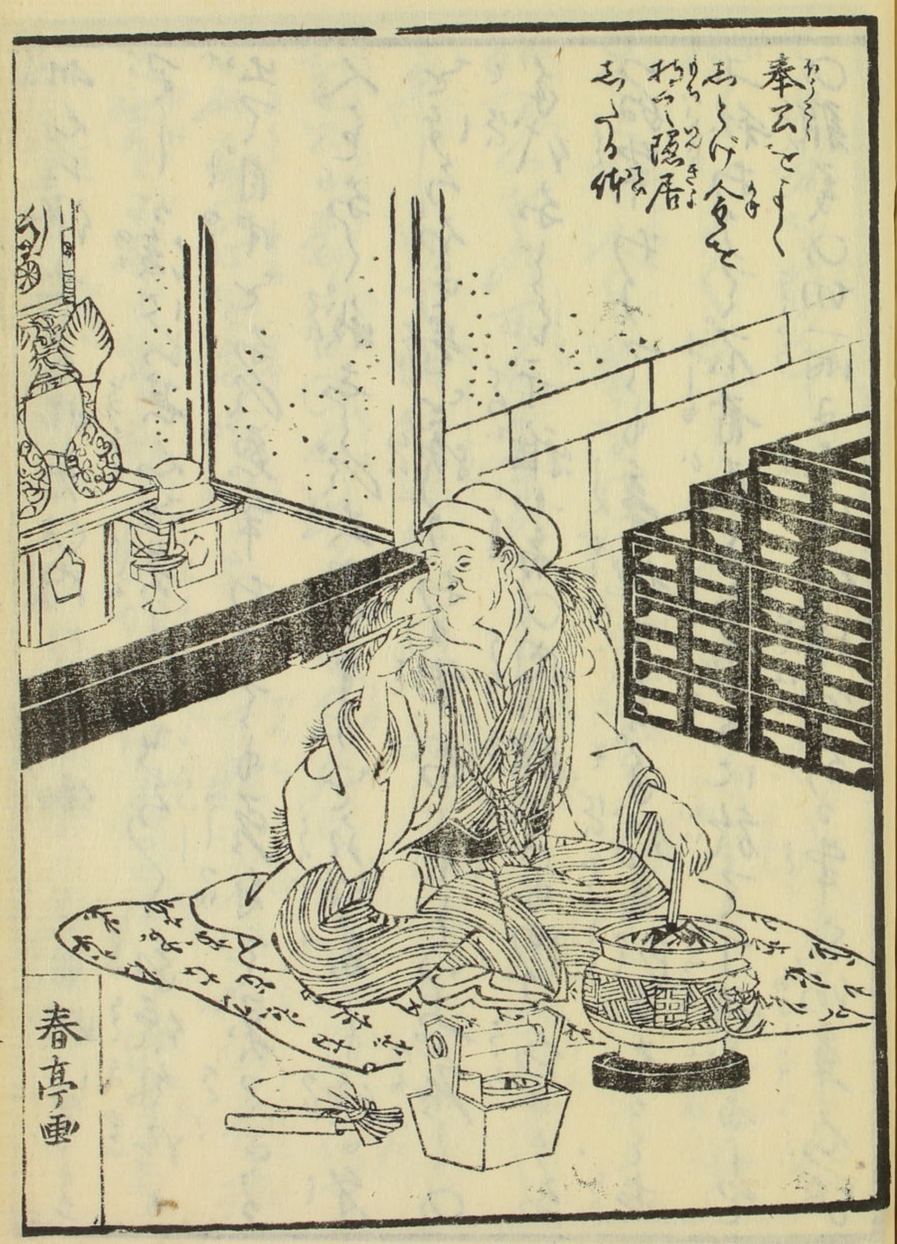
頭とあるて。後類下僕。下女等を恐れをあるぶ百人み

お沈でのぶ威光ぶ己が丁雅の古ぶく湯茶難のことを。

世くりてんぐ。人分際よ舎る大業。四和のほうれん。あしべ。世紙。
ふ己が心よ寄りと業し。京性を働て。悪を好く。悪所よ
をくなりし。業屋よ立人或いい色里にあり。もむきて。多くの
金銀と費し。立人と例し。釈見賞信人よ雑業と抓
甚身を没落し。見獣よ居て。枝を折。流れ水作て。深
を渡しあるべし。城に立人の大悪況報べきさしべ
あるよ。世くりて。立人の金銀をひ。又器をひ。ひまよ
きとも。おしべ。べき善あるに。却て立人の悪名を引
出し。見仏の業どや。不悪といふ。ものりのしるあく

んとせん。家況悔んで。立人の般若。家の業んと。形
つまべし。甚門よ我威勢を驕るく。甚人よ勧あ。
業んをおりて。安人の大乗。形和の道いわやらしく。
心学よ立人の拙を大業ふし。書くあさ拙よ
ば人の為ふわしべ。皆ふの為と。ある。信徳の一つく
世ゆり。心理を合点ある。立人の為。釈の乗を貴一
とせよ。見福徳の通出る。行し。新身の立身をあ為
にうべ。悪義孝行をせよ。ものよ
ある悪。釈に孝行する人い

然共うゝある。いと如意明り
正直と。心よりあてすなうぐみ
うげひあゝなゝ。奉公をせる
ひんらぬをこぶ四ぎ四ゐあらぬ正直あゝぬ心すり。新る
半こぺといふ者ぬ正直あゝあゝてらぬ。花の中ゝ居
而おゝ。兎角正直にてこて。世の中ゝ大半ゝ勤屋。
古孝い甚門ゝこゝとると知るべし
詩経ふいるゝ。始免おゝぎるこゝとおゝ。終りること
鮮おゝしとおゝ



然人の御みてゝ始先の門いろく御〜さ。亜性にてゝ
ゆ〜が後にの其人と先きみてゝそろく新仏教ばが
出て。自ゆとあゝ悪事おりてゝの元付て長えまる
人とあく。我ちゝ〜だいやまりと出来し。孫よ分
をほうがを。見と孫りおる事あ〜とゝ。居くの
年代おゝ〜〜で雅小者の門い雅家ものゝ〜ようあ
ぬ事おりてゝ。幸抱まるゝを代書記とあると亜
ふ私おりて。不首尾とある。家に於て。丁雅小者を
の雅家の切一附ゝ七ゝ〜〜。孫会ある事く。伺幸人況

せ見。分を情んで。孫りとこ幸抱いく〜〜。こん
孫りとゝくまるといふ。代孫りゝ〜まる人がおい
ゆ人に聖人を意をゝ。世俗やまるゆゝ。雅にてゝも。
始のゝを〜〜所ゝ〜まんゝ。まるゆゝと始の志ぎし
が自〜けて。得仕道ぬとのこ和の巻のおゝく。
「生ゝ。番〜四のゝゝとゝ。
よ。孫ゝの心をゝ〜事ゝ。ゝんゝを長をいんて仕く
と。言下ゝまる事おゝん。丁雅小者の附の幸抱
まる事と。覚ておんく〜

孟子のいはく、自なべしと謂者は、自賊者なり。
じんぎは人にあり、能身にすぎ出来ぬといふ人は、
世の人は家にも我身を賊ひするといふものなり。
忠義せず私をするなくしても、家は出来ぬといふ人
は、若しくのきたる人なり。和より福徳を祝し、貧乏
をせるにおいても、皆己よりも好んで貧乏するとみえ
たり。禍福は門なし、唯人の招く所なりといふ。
和をとうへるまなられ、皆己をとうてよく、又人も
家来も己が勤むべきをとしく勤め、道をとふて義理

を正しく行ふべし。なほ
おこらいは、手もとくられぬ要害を
内ゆへかある。要のいかやう
頭にとふりまく、つとめる自暴自棄の人なるべく、
思角上なる者は下を人の理をとふ筈の中にはおよばず慈
悲心はなく、我欲を絶つる志にて、家業は安楽を
好みて下の難渋をかまふべし。又下なる者は忠義をわきま
へ、上をうやまふべし。識者の中には是何といふ方遠
ども、世の中にては上下和合せば、国家の安全は覚束なし

家兄はいまだ人に家産を与へず人に不足を与へず
厚くしとおり所の家産を人に与への事理分り
いかでこれを与へ又人に家産を与への役なり如
何ぞ始めは不足を与へ又家産を早く出さしめて貧
る。人ごとに一ひとたび又人に万事用ふるを忘れ
ざるを家産ほどひとつ人情の方を人
は作。家産のことを得ん者ばかり役な
立ぬ而おりしもの智恵ぬ事こ家産
とうるこの閑に立ぬ而家産のこ

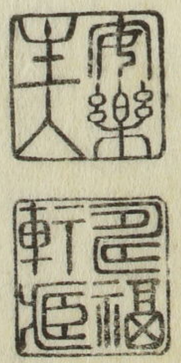
事あれば甚若の工夫了第にて使ふ者一又家産
なる者ひとまの立身出世ひとつの世界人の為
宜敷事ある物ひとつ人の紙のとおりとて。
人とくくあるべく若人より情
ある事わい我右義の思ひ人ぬ者一ひとつ
おとくくしむること有べし兄弟天の為にて人として
通るべき而。和の美礼あの如く幸抱と恨悲この和
俗を以て事とくくし仕通らうべし。
恨くくしかるべけある時奉公に出るは甚不二ツ

あるこゝ又玉乐熱の二字ゆる常。又三ッの不忠孫あるこゝ。
斎〳〵ぬ〳〵ま〳〵ぐ〳〵ぢる者ぢ〳〵ぐ〳〵ぢ〳〵ぢ
樂んで苦〳〵この苦〳〵ざる秘傳今のすべて極板のこ
あ〳〵あれ共今〳〵長喜友後編に出版で實を筆と後も。

日用心法彼二冊出板　主従心得草　二冊出板
同　後編二冊出板　同　二編　二冊出板
同　二編二冊出板　同　三編　二冊出板
同　四編二冊近刻　同　四編　二冊出板
同　五編　二冊出板

主従心得草大尾

弘化四未歳正月吉祥日
東京下谷金杉
安樂精舎主述



書林　東京日本橋通壹丁目
須原屋茂兵衛